

展覧会 国立映画アーカイブ開館記念

# 生誕100年 映画美術監督 木村威夫

Inaugurating NFAJ:  
Art Director Takeo Kimura  
at His Centenary



NFAJ  
国立映画アーカイブ  
National Film Archive of Japan

## 国立映画アーカイブ展示室(7階)

開室時間:午前11時~午後6時30分(入場は午後5時まで)

\*毎月末の金曜日のみ開室時間を午後8時まで延長いたします。(入室は午後7時半まで)

料金:一般250円(200円)/大学生130円(60円)/シニア、高校生以下及び18歳未満、障害者(付添者は原則1名まで)、

MOMATパスポートをお持ちの方、国立映画アーカイブ及び東京国立近代美術館のキャンパスメンバーズは無料

\*料金は常設の日本映画の歴史館の入場料を含みます。

\*()内は20名以上の団体料金です。

\*学生、シニア(65歳以上)、障害者、キャンパスメンバーズの方はそれぞれ入室の際、証明できるものをご提示ください。

\*国立映画アーカイブの上映観覧券(観覧後の半券可)をご提示いただくと、1回に限り団体料金が適用されます。

主催:国立映画アーカイブ/特別協力:京都造形芸術大学芸術学部映画学科/協力:日本映画・テレビ美術監督協会

国立映画アーカイブホームページ <http://www.nfaj.go.jp/>

2018年  
10月16日<火>



2019年  
1月27日<日>

\*月曜日(12月24日(月)~1月3日(木))は休室です。

\*期間中に展示替えがございます。

思考する映画美術  
— 木村威夫の人と仕事

# 映画美術とは、人の情念を表現する仕事である——木村威夫

今年生誕100年を迎えた映画美術の巨匠木村威夫(1918-2010)は、1944年のデビュー以来60年以上にわたって第一線で活躍してきました。大手映画会社の大作から若手の自主製作作品まで、劇場公開された長篇だけでも240本を超える作品に参加し、豊田四郎、田坂具隆、鈴木清順、熊井啓、黒木和雄など、個性の異なる名監督たちとの仕事の中で、綿密な考証に裏付けられた大胆な発想力と、リアリズムと幻想の境界を自由に飛び越える柔軟性を発揮して、数々の名作誕生に貢献しました。また、大学や映画教育機関では後進の育成に積極的に携わり、晩年には監督としてもデビューするなど、最後まで旺盛に活動を続けました。

本展覧会では、木村威夫の遺品の多くを保管する京都造形芸術大学芸術学部映画学科のご協力をいただき、本人が描いた図面やデザイン画などの貴重な資料を通じて、美術監督として独自の世界を築き上げた木村威夫の思考の軌跡をたどります。

## 木村威夫略歴

1918年東京生まれ。1935年から舞台美術家伊藤薫に師事。1941年日活多摩川撮影所入所。翌年日活は数社と合併して大映になり、1944年伊賀山正徳監督『海の呼ぶ聲』の美術で一本立ち(公開は翌年)。以後も順調にキャリアを積み、1954年製作再開した日活に移籍。幅広いジャンルで手腕を発揮し、戦後の日本映画黄金期を代表する美術監督のひとりとして活躍。1972年フリーとなった後は独立系の作品でも才能を開花させる。毎日映画コンクール美術賞ほか受賞多数。2004年には監督デビューを果たした。



不忍池にて 2002年 撮影:松尾正信



野良猫 2001年:  
『ピストルオペラ』(鈴木清順監督 2001年)



別れの道 1979年(土曜赤川)  
(熊井啓監督 1979年)



イメージ画 2003年頃:  
『父と暮せば』  
(黒木和雄監督 2004年)

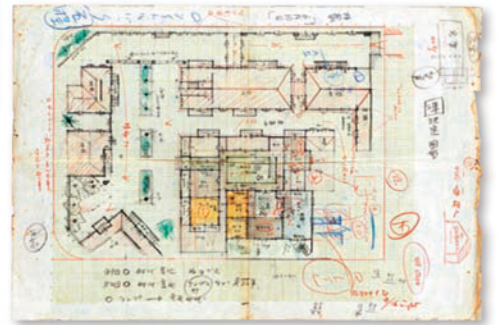
Born one-hundred years ago this year, Takeo Kimura (1918-2010) was a master of art direction for films. For over 60 years following his debut in 1944, he stood at the very forefront of the film industry. Just counting full-length movies that had theatrical releases—ranging from movies by major film studios to independent works by young artists—he had involvement in over 240 films. He also worked with famous directors of widely disparate talents and personalities, among them Shiro Toyoda, Tomotaka Tasaka, Seijun Suzuki, Kei Kumai, and Kazuo Kuroki. He contributed to numerous masterpieces by demonstrating bold creativity backed up by detailed historical research and flexibility that allowed him to jump freely between realism and fantasy. He was also actively involved in the education of up-and-coming artists at universities and film schools. He worked with great energy until the very end, even making his debut as a director in his later years.

Held with the cooperation of Kyoto University of Art and Design's Department of Film Production, which houses many of Kimura's works, this exhibit follows the trajectory of thought whereby Kimura built unique worlds as an art director. It features various precious items, including drawings and designs that Kimura created himself.



シナリオ準備簿ほか:  
『ツインネールワイゼン』  
(鈴木清順監督 1960年)

船館街準決定図面:『サンダカン八番娼館 望郷』(熊井啓監督 1974年)



『木曾坊遺文 千利休』セットにて 撮影:大橋弘



スクラップブック(新聞社)



セットスケッチ帖:『春琴物語』(伊藤大輔監督 1954年)

## 映画美術について

映画は多彩な職能集団によって製作される総合芸術です。その中で映画美術は監督の演出方針に基づいて、シナリオに描かれた時代、場所、空間を具体的に示す役割を担っています。撮影がスタジオであれロケーションであれ、デザインを練って図面を引き、各美術パートに指示して演出プランを形にすべく精魂を傾けます。他方では予算の制約と理想の追求の狭間で現実的な解決を見出すバランス感覚も必要です。映画美術は鑑賞される《美術品》とは異なる実用的な《造形物》で、撮影が終われば解体される運命にあります。しかし、この《造形物》はスクリーンの中でその《美術》としての輝きを保ち続けるのです。

## ＊トークイベント

12月15日(土)——木村威夫の映画美術の世界  
高村裕司  
(京都造形芸術大学芸術学部映画学科准教授)

1月19日(土)——展示品解説  
紙屋牧子(国立映画アーカイブ特定研究員)  
＊詳細は後日ホームページなどでお知らせいたします。

## ＊上映企画

### 『生誕100年 映画美術監督 木村威夫』

国立映画アーカイブの開館記念上映企画として、『生誕100年 映画美術監督 木村威夫』を開催。幻の美術監督第一作『海の呼ぶ聲』(1945年)を含む20作品を上映。

会期:2018年11月6日(火)～25日(日)

※会期中に木村威夫と仕事を共にした美術デザイナーによる座談会を予定しています。

＊詳細は後日プログラム、ホームページなどでお知らせいたします。



国立映画アーカイブは長瀬映像文化財団の支援を受けています。

〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6  
お問い合わせ:ハローダイヤル03-5777-8600  
国立映画アーカイブホームページ  
<http://www.nfaj.go.jp/>



## 交通

- ▶ 東京外口銀座線京橋駅下車、出口1、出口2から昭和通り方向へ徒歩1分
  - ▶ 都営地下鉄浅草線宝町駅下車、出口A4から中央通り方向へ徒歩1分
  - ▶ 東京外口有楽町線銀座一丁目駅下車、出口7より徒歩5分
  - ▶ JR東京駅下車、八重洲南口より徒歩10分
- ＊2018年11月上旬(予定)まで、京橋駅改修工事に伴い出口1は閉鎖となります。